

Japan Society of
Gene and Cell Therapy



～ 高久史磨先生・追悼号 ～

〔巻頭言〕

高久史磨先生を偲ぶ

高久史磨先生は、1995年5月21日に東京大学安田講堂で開催された第1回日本遺伝子治療学会の大会長を務められ、本学会の創設に大きく貢献されました。また、遺伝子治療研究の育成・発展にも多大なる功績を残されました。本学会広報委員会として、学会ニュースレターの追悼号を企画させていただき、歴代の学会長の先生からのご寄稿を冊子としてまとめさせていただきました。心溢れる思い出の数々が綴られております。

高久史磨先生の多大なるご功績に改めて敬意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。

教育広報委員会委員長

中神 啓徳

高久史磨先生 御略歴



主な受賞歴

1971年 ベルツ賞
1994年 紫綬褒章
2012年 瑞宝大綬章

ご略歴

1954年 東京大学医学部医学科卒業
群馬大学医学部助手、東京大学医学部助手、シカゴ大学留学などを経て、
1972年 自治医科大学内科教授に就任
1982年 東京大学医学部第三内科教授
1988年 東京大学医学部医学部長
1990年 国立病院医療センター院長（東京大学医学部第三内科教授兼任）
1993年 国立国際医療センター初代総長
1996年 自治医科大学学長
2004年 日本医学会会長
2022年 3月24日ご逝去 91歳没

高久史麿先生との思い出

高久史麿先生の思い出

女子栄養大学副学長、自治医科大学名誉教授

第6回 JSGT学術集会会長 香川 靖雄

高久史麿先生の訃報に接し、先ず諸学会での先生の笑顔を思い出しご冥福を祈りました。

医学関係の多くの財団の理事や審査員として協力



先生は大変指導力に富んだ方で、血液学がご専門で1972年から自治医科大学内科教授、1982年から東京大学医学部第三内科教授、1988年から同医学部長を務められました。日本医学会の会長はじめ、20数年前には発足間もない本学会の会長も務めて下さいました。1996年には再び自治医科大学に2代目の学長として戻ってこられました。初期の遺伝子治療は血液学と関係が深かったため高久先生にはいろいろとご指導を頂きました。当時、私は自治医大生化学教室でミトコンドリア病MELASの病因がミトコンドリアDNAのLeuUUR変異によることを発見し、MELASの遺伝子治療に患者家系の卵子中に、若い女性の卵子中の健全なミトコンドリアを注入して治療する動物実験にも成功しました(Gene Ther. 4(1): 6-10, 1997)。健全な卵子は体外受精の余りの卵子を使用します。この成功で2000年度の本学会会長を務めさせていただき国際会議も行いました。この遺伝子治療は諸外国では人体に応用され成功していますが、患者はミトコンドリアDNAの提供者と両親の3人の遺伝子を持つため、倫理上、日本ではまだ実施されていません。

先生は私の3年先輩で自治医大建学当初から中尾初代学長を補佐して大学の執行部の中心でした。私

がCornell大学で米国永住を申請していた時に高久先生から新設の自治医大の教授として是非来て欲しいと懇切なお手紙を頂いたのが縁です。高久先生は私が米国で医学生物学の教育に従事し、国際生化学分子生物学連合の機関誌Biochemical Educationの副編集長であることを知って、従来の単位制の欠点を改め米国医師国家試験のStep1と2に相当する「総合判定試験」の責任者に私を任命したのです。幸い医師国家試験の1期生、2期生の全国1の合格率を生み、現在も10年連続合格率全国1位です。何といっても地域医療で初めての様々な困難に遭遇した卒業生の支援が重要でした。それだけに同窓会では高久先生と一緒に卒業生の実情を聴き様々な支援を行ったのです。テニスを愛好されたことは有名です。そして困難を克服し、建学の理想を実現した感激を昨年50周年記念座談会で先生と共に語りました。

自治医科大学創立50周年記念座談会(含む遠隔) 都道府県会館 司会永井学長 2021年10月5日



残念ながら本年5月14日に自治医大創立50周年祝賀式典目前のご逝去でした。重ねて先生から頂いたご厚意に感謝し、ご冥福をお祈りします。

高久史麿先生のご逝去を偲んで

東京慈恵会医科大学名誉教授

第11回 JSGT学術集会会長 衛藤 義勝

1994年日本遺伝子治療学会が創設され第1回の会長を歴任された高久史麿先生が今年3月24日に91歳でご逝去されました。先生は日本遺伝子治療学会(JSGT)の生みの親の御一人として本学会の設立に貢献され、ご逝去されたこと大変残念に思います。

高久先生は、私共のJSGCTの学会に何時も大変お忙しい時間を割いて参加され何時もにこやかに挨拶を頂き、大変思い出深い先生です。勿論先生は日本医学会を代表する先生で私も様々な機会にご挨拶をお願いしております。私が2009年に大学を退任し、東京会館で退任祝賀会を開催させて頂いた時も、心温まるご挨拶を頂きました。又1996年第39回日本先天代謝異常学会、2005年第11回日本遺伝子治療学会等主催時には高久先生には来賓のご挨拶を頂き公私ともに大変お世話になりました。又第一三共生命科学研究振興財団、難病財団他多くの財団理事会等でも先生の何時も適切なアドバイス、含蓄のあるお話を頂き、大変感謝致しております。先生はテニスが趣味で時々会議からの帰宅前にはテニスをされて帰られるそうで、お年になっても、しっかりした足取りなのはテニスのお蔭といつも言われておりました。まだまだ先生にはわが国の医学会の巨星としてご活躍頂きたいと祈念しておりましたが、先生のご逝去はわが国医学会の大きな損失と今更ながら残念に思います。永年の日本医学会へのご功績並びに日本遺伝子細胞治療学会へのご指導を心から感謝致します。

先生どうぞ安らかに眠りください。



2013年 NHKでの放映時：在りし日の高久史麿先生。
何時も見られる、優しい笑顔が大変印象的です。

遺伝子治療と高久委員会

日本医科大学

第12回 JSGT学術集会会長 島田 隆

高久先生に初めてお会いしたのは1991年10月に厚生省で行われた第1回「遺伝子治療に関する専門委員会」でした。遺伝子治療は1990年6月に米国NIHでADA欠損症の治療として開始されましたが、日本ではほとんど注目されていませんでした。しかし、臓器移植や薬害エイズの問題を抱えていた厚生省にとっては新たな難問だと考えられていました。特に、研究者が先を急いで和田移植の繰り返しになり、その後の発展が阻害されてしまうことが危惧されました。そこで遺伝子治療研究の実態を調査するために厚生科学会議に、高久先生を委員長とする「遺伝子治療に関する専門委員会」が設置されました。米国NIHから1991年9月に帰国した私(島田)はこの委員会に召集されました。

当時の日本では遺伝子治療は全く新しい研究領域で、研究者も少なく、倫理的な検討も行われていませんでした。高久委員会のメンバーも高名な医学研究者が集められましたが遺伝子治療の専門家はいませんでした。ゼロからの議論をこの委員会で始めることになり、日本の遺伝子治療の方向を決定する重責を高久先生にお願いすることになりました。

高久委員会の目的は遺伝子治療について幅広い調査検討を行い、将来の日本での遺伝子治療実施を準備することでした。ところが、委員会が活動を開始した直後の1992年に北大でADA欠損症の患者が見つかったことで状況は一変しました。日本でも直ぐに遺伝子治療が行われる可能性が出てきたため、実施体制を早急に整備する必要に迫られることになりました。

高久先生は先ず、ガイドラインの作成が重要だと考え、医科研の小澤敬也と私が指名され草案を作成することになりました。厚生科学の椎葉茂樹を加えた3人で、当時唯一存在した米国NIHのガイドライン(1985年作成のPoints to Consider)を参考に、新たな知見や、日本の状況を考慮した日本独自のガイドライン(案)を1993年に高久委員会に提出しました。この案を元に1994年には厚生省と文部省から同じ内容の指針(ガイドライン)が正式に告示され、遺伝子治療臨床研究の審査委員会も設置されました。

北大のADA欠損症の患児は定期的な酵素補充量を受けていましたが、次第に効果が減弱していました。遺伝子治療臨床研究の体制が整備されたことで、北大から正式に遺伝子治療の申請が提出されました。多くの修正や追加資料の要求が行われましたが厚生省及び文部省からの承認が得られ、日本で最初の遺伝子治療が1995年8月に開始することができました。

私は高久委員会の委員として、米国NIHからの情報収集、北大病院の視察、ガイドライン作成などを担当し、この間の経緯を直接見てきました。遺伝子治療のバックグラウンドが全く無い日本で、短期間で体制整備を完了し、患児の病状が悪化する前に遺伝子治療が開始できたのは、高久先生の強い指導力と、北大小児科の崎山先生の臨床医としての誠実な対応のためだと思っています。未だ有効性も明確でない実験的医療を東京ではなく北海道で最初に行うことについてはマスコミや厚生省でも懐疑的な意見がありました。基礎系の審査委員からは厳しい要求が出されました。しかし、高久先生の冷静で的確な判断で次第に意見が集約され最後は全員一致で承認が得られました。

高久委員会は日本での最初の遺伝子治療を可能にただけでなく、その後の日本の医療制度に影響を与える新しい提案も行っています。この時、発出された遺伝子治療ガイドラインは、当時は未だ日本に定着していなかったインフォームドコンセントを正式に要求した最初の臨床研究ガイドラインになりました。又、高久先生が委員長を務めた遺伝子治療臨床研究中央評価会議は日本で最初に公開で行われた審議会になりました。

私はその後も、遺伝子治療関連の学会や委員会で高久先生と一緒に仕事をさせていただきました。東大や自治医大では大変厳しい先生だったという話を聞いていましたが、10年間のアメリカ留学から帰国したばかりの私にとっては日本の医学医療の問題点をいろいろ教えていただいた温厚で信頼できる先生でした。高久委員会で仕事が出来たことで、その後の私の研究者人生に影響した様々な経験をすることができました。今でも、大変感謝しています。3年前に日本の遺伝子治療学会でお会いして昔話をしたのが最後になりました。

突然の訃報に接し、高久先生への追悼文として、30年以上前に先生の下で担当させていただいた日本

で最初の遺伝子治療にまつわる思い出を記載させていただきました。

心よりご冥福をお祈りします。

高久史麿 先生への感謝

大阪大学 理事・副学長

第15回 JSGT学術集会会長 金田 安史

今年3月に高久先生がご逝去されました。訃報に接し、日本の医学界の偉大なリーダーを失った喪失感に呆然としてしまいました。

私は、2年間の海外留学期間を除けば大阪大学でずーっと研究をしてきましたので、東京におられた先生とは、教授になる前は全く面識がありませんでした。医学部生時代に内科学や血液学の教科書などでお名前を存じ上げていただけでした。私が細胞生体工学センターの助教授であった1992～1998年の6年間は、大変苦しい時期でした。1989年に発表した生体への遺伝子導入法の様々な可能性を探索している中で、研究費も潤沢ではなく講座での教授との確執もありましたが、阪大医学部や全国や海外の共同研究者に支えられながら、将来の難病治療とさるなる研究の発展を夢見て日々を送っておりました。1995年度末だったと思いますが、厚労省から遺伝子治療研究の支援ということで突然1千万円をいただきました。噂では高久先生を中心とした有識者が遺伝子治療の若手研究者を支援する予算を獲得しトップダウンで決められたようでした。さらに翌年には5千万の予算が付きまして。結局これは厚労省の科学研究費としてそのあと大型予算が組まれることになっていきました。この研究費で私の研究は安定になり、多くの共同研究者とNature Medicineを連発できるようになり、遺伝子治療研究が一気に加速しました。そのこともあって幸いにも大阪大学医学部に新設された遺伝子治療学講座の教授に選ばれたわけです。全く見ず知らずの、教え子でもない他大学の研究者への高久先生のご配慮がなければ、私はどうなっていたかわかりません。感謝の言葉ありません。若手研究者の支援には、今でもこのようなトップダウンの支援策が必須だと思います。しかしこのようなことができるリーダー

はもうおられないかもしれません。

1995年に北大での遺伝子治療臨床研究を進められたのも高久先生でした。ベクター製造のためのDNA-vecを複数企業の連携で作られたのも先生でした。企業によるベクター製造が大切という当時としては誰も思いつかない高い見識だったと思います。日本が世界では2番目に遺伝子治療学会を立ち上げましたが、その第1回の会頭もおつとめ頂き、毎年学会には出席され、最前列で講演をお聞きになり、英語でも質問もされておられました。高久先生は多くを語られず、的確なコメントと真摯な態度で、我々に学会のあるべき姿、研究の方向性を示されているように思えました。私が2009年から9年間日本遺伝子治療学会の理事長を任されたときも、いつも励ましていただいたことを覚えております。

原稿を依頼されれば、すぐに作成して返送されました。今ならコンピューターですが、当時はいつも書類を持ち歩いておられ少しでも時間があれば、隅っこに座られて書類に目を通したりコメントを入れたりしていました。いつも下を向いて歩いておられ、誰彼となく頭を下げて挨拶されていました。そのような光景が走馬灯のように思い出されてきます。ありがとうございました、というほかありません。

高久史麿先生を偲んで

自治医科大学 名誉教授・客員教授

第16回 JSJT学術集会会長 小澤 敬也

高久史麿先生が令和4年3月24日に永眠され(享年91歳)、深い喪失感を禁じ得ません。

高久先生は血液内科がメインのご専門でしたが、自治医大では、それ以外にアレルギー・膠原病科と消化器内科の教授を兼務されました。その後、東大第三内科(3内)教授に就任されましたが、3内は内科系全てが揃った大講座でしたので、カバーされる分野はさらに拡がり、幅広く活躍されました。そこで、私は海外の知り合いには、高久先生は“Emperor of Science in Japan”と勝手に紹介していました。因みに、高久先生のお誕生日は2月11日(建国記念の日)であり、お名前も特別でした。

私がメインテーマとする遺伝子治療にも高久先生は大変興味をお持ちでした。日本で遺伝子治療臨床研究を開始するに当たって、遺伝子治療のガイドライン(厚労省)を作成されましたが、島田隆先生(日本医大)と私が協力させていただきました。米国のRACミーティングにも参加されたことがありましたが、日本からの参加ということで、特別に発言を求められていました。一方、私は時差もあり、意識を失っていた時間帯もありましたが、どうもそれを見られていたようで、高久先生からは後で「小澤君は気楽でいいね」と皮肉を言われてしまいました。

さて、日本最初の遺伝子治療は1995年にADA欠損症に対して北大で実施されましたが(当時はリンパ球が標的細胞)、同年、日本遺伝子治療学会(JSJT)第1回学術集会が東大安田講堂で開催され、高久先生が学会長を務められました。後年、高久先生がJSJT学術集会に参加されると、皆さんが英語で発表することに度々驚いておられました。実は、高久先生が学会長をされた第1回からのJSJTの方針だったのですが、---。

なお、2010年には第16回JSJT学術集会の学会長を私が担当し、宇都宮で開催しました。遺伝子治療が世界的に復活し始めた頃であり、企画に力を入れ、プログラム抄録集の体裁も一段とバージョンアップしたつもりです。

高久先生のご功績については、余りにも広範に亘るため、誌面の都合で詳細を紹介することはできま

せん。特筆すべき点としては、高久先生のもとには多くの優秀な若手が集まり、現在では我が国の医学界の中核的役割を担う多くの人材を育てられたことが挙げられます。思い出されるのは、1982年に高久先生が東大教授に就任された際、「これからは若い人にチャンスを与えるのが私の仕事だ」と話されたことです。そして、それから30年後の瑞宝大綬章受賞記念パーティー（2012年）では、「多くの若手を育てたことを評価されたと思う」と挨拶されました。

高久先生は新しい話題が大好きで、科学の最新情報を米国から定期的に仕入れておられました。Nature誌なども印刷物が届く前にチェックされていたので、高久先生の話について行くのは大変でした。遺伝子治療やゲノム解析などの分野に関連して、電話でのお問い合わせを突然いただくことも度々あり、いつも冷や汗をかいていました。

高久先生は即断即決で仕事が極めて早く、高久先生が司会をされた委員会などは直ぐに終わってしまうことでも有名でした。また、話の長い人は高久先生と波長が合わなかったと思います。学術集会の講演などでも、演者は時間通りにプレゼンを終わらせないと、高久先生はネガティブ評価をされていました。さらに座長に対しても、「発表時間をコントロールできないのは座長の能力の問題だね」と厳しかったことを思い出します。

まだまだ沢山のエピソードがありますが、誌面が尽きてしまいました。高久先生のようなスケールの大きな医学者はもう出てこないと思われます。長年に亘るご指導に感謝し、謹んで哀悼の意を捧げます。



私が学会長を務めた第16回日本遺伝子治療学会（JSGT2010）学術集会（平成22年7月；宇都宮）の懇親会での写真。



高久史磨先生の座右の銘「努力」。
東大医学部教授を退任された際、医局員に配られた益子焼のお皿で、文字は全て手書き。

高久史麿先生の思い出

東京大学定量生命科学研究所

第17回 JSGT学術集会会長 谷 憲三朗

高久史麿先生のご逝去を悼み、心からご冥福をお祈り申し上げます。

昭和56年日光金谷ホテルでの造血関連シンポジウムに、浅野茂隆先生(当時講師)と一緒に参加した際に、高久先生に初めてお目にかかりました。当時私は東京大学医科学研究所・三輪史朗教授の研究室の大学院生で、赤血球酵素異常による先天性溶血性貧血患者さんの異常酵素の生化学的解析をテーマとして頂いていましたので、本シンポジウムでの赤芽球コロニー解析や白血病細胞コロニー解析研究などの当時の新しい研究に触れさせて頂き大変感銘を受けました。会場での高久先生は終始一番前に鎮座され、オーガナイザーとして多くの鋭い質問・議論をされ、その迫力に畏敬の念すら抱いたことを記憶しています。私事で恐縮ですが、その後私は米国シティオブホープ医学研究所に留学させていただき、分子生物学の研究手法を学び、帰国後、三輪教授の終生のご研究テーマでした赤血球ピルビン酸キナーゼ(PK)遺伝子のクローニングを仰せつかり、教授のご退官前にヒト肝型および筋型PKcDNAクローン化に成功することができました。高久先生は昭和62年9月より平成2年3月にかけて、三輪教授のご後任として、東大医科研・病態薬理学および同附属病院内科学教授を、東大医学部第3内科教授および同医学部長の重責を担っていらっしゃるにもかかわらず、併任されました。私はその間に先生のご支援のもと、ヒト正常肝臓型PKcDNAをレトロウイルスベクターでマウス骨髄細胞に遺伝子導入することで、PK異常症の治療モデルとして発表することができました。ある日、浅野先生(当時助教授)から、「谷さんは学生時代テニス部だったよね？高久先生が医科研でテニス相手を探しておられるので一緒にしたら？」との指令をいただき、毎週教授回診開始1時間前、高久先生と医科研コートでテニス汗を流すひとときをいただきました。二人で雨がかりにはコートの水を掃き出し、練習し、その後には必ずクレーコートのブラッシング清掃を終えて、回診に臨みました。先生の一途に白球を追われるお姿にはいつも圧倒されていました。時には練習後、突然新規抗生物

質等に関する試問を頂くこともあり、なかなか息を抜くことができませんでした。高久先生の千客万来の気さくなお人柄を反映してか、次第に医科研職員はもちろん近隣在住のエクアドル大使も交えた高久先生を囲むテニス会が発生し、時々週末も先生と医科研コートやエクアドル大使私邸などで一緒にすることがありました。



高久先生は東大ご退官後、国立国際医療センター総長になられ、ご多忙さも激増したことから、このテニス会は自然消滅してしまいました。当時、先生の手帳を見せていただく機会がありましたが、昼はもとより夜も1日2〜3サイクルのご予定がぎっしり書き込まれており、そのご多忙さに驚愕しました。平成10年から医科研病院で私達は、浅野病院長のご指導のもと、GM-CSF遺伝子導入自家培養腎癌細胞ワクチンを用いた免疫遺伝子治療臨床試験を開始させて頂きましたが、当時高久先生には第1回日本遺伝子治療学会の会長になって頂き、大所高所からのご指導、ご激励を頂戴致し重ねて心より感謝いたしております。その後私は九州大学へ異動し、先生とテニスをさせていただく機会は無くなりましたが、時折東京での血液・遺伝子治療関連のセミナー等でお目にかかり、懇親会では満面に笑みを浮かべて、「がんばってるね！」といった励ましの言葉を頂戴したことが今も忘れられません。そのような先生が、コロナ禍前の会でお会いした時、加齢黄斑変性症になったためテニスもできなくなったとお話しされた時には、先生のご心中をお察しするのに余りありました。ご令息のご手記では先生はその頃から多重の病気を抱えておられたとのことで(<https://www.m3.com/news/iryoishin/1040196>)、儘ならぬご体調が大変もどかしくていらっしやったのではないかと拝察いたします。先生のご逝去は日本の医学、医療に取って大きな損失であることは言うま

でもありません。先生から頂戴した貴重な思い出を座右の銘に、先生が目指された日本の医療のさらなる進化に向けて少しでも貢献できればと願う今日この頃です。

改めて高久史麿先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

高久史麿先生を偲んで

岡山大学学術研究院 医歯薬学域
消化器外科学 教授

第19回 JSCT学術集会会長 藤原 俊義

日本の遺伝子治療の発展に大きく貢献された高久史麿先生が、本年3月24日にご逝去されました。長らくご指導いただきましたことに感謝申し上げ、ご冥福をお祈りいたします。

初めて高久先生とお話させていただきましたのは、先生が学会長として1995年5月に東京大学安田講堂で開催された「第1回日本遺伝子治療学会総会」の時だったと記憶しております。私は岡山大学第一外科で臨床に従事していた30歳代の若輩者でしたが、浅野茂隆先生にご紹介いただいてご挨拶させていただきました。私は米国国立がん研究所のRosenberg博士が始めたがんの遺伝子治療に憧れ、その門下生だったMDアンダーソンがんセンターのElizabeth Grimm博士、Jack Roth博士の研究室での留学を終えて前年帰国したところでした。米国ではがんや難病に対する遺伝子治療の臨床応用が進んでいましたが、まだ米国遺伝子治療学会(ASGT)は設立されておらず、日本で先駆けて日本遺伝子治療学会(JSCT)がスタートできたのは、高久先生の先見の明とリーダーシップによるものであると心から敬意を表する次第であります。

その後、私たちは岡山大学からがんに対するp53遺伝子治療の臨床試験の申請を計画しましたが、高久先生はそのプロトコルを審査いただく「厚生科学審議会先端医療技術評価部会」の部会長をお勤めでいらっしゃいました。私は事前に先生に概要をご説明するためにアポイントメントをお願いしましたが、指定された日がなんと1996年10月に先生がパシフィコ横浜で開催されていた「第55回日本癌学会学術総会」の会期中でした。学会主催中でたいへんお忙しいので

はと恐縮して会場の学会長のお部屋を訪問したところ、少し遅れて入って来られて、テニスがちょっと延びてしまって申し訳ないとニコッとされました。それから私たちの計画をじっくり聞いていただき、非常に重要なコメントや修正箇所を多くご指摘いただきました。ライフワークバランスの大切さは今でこそ広く認識されていますが、当時からメリハリのあるお仕事ぶりで多くの重要な要職を務められていた高久先生の人間的な器の大きさを改めて強く感じます。1998年10月17日に高久部会長のもと、私たちのp53遺伝子治療臨床研究はその実施が承認されました。



1998.10.17 NHKニュース映像
厚生科学審議会先端医療技術評価部会が承認

欧米のみならず本邦でも、やっと遺伝子治療が日常診療の一部に入ってきております。しかし、遺伝子工学技術の進歩とともに、まだまだ多くの疾患に遺伝子治療技術を応用した画期的な治療戦略を提供していくことは可能と思われます。高久先生が蒔かれた遺伝子治療研究の種を、今後、私たちやさらに若い世代がいかに大樹に育てていくかが重要であり、そのためには本学会が中心となって研究者のネットワークを拡大していくことが肝要と考えます。高久先生におかれましては、遠い空の上から引き続きやさしい眼差しで遺伝子治療研究者のチャレンジを見守っていただければと思っております。改めてご冥福をお祈り申し上げます。

高久先生と新しい技術開発

第20回 JSGT学術集會会長 齋藤 泉

今年の遺伝子細胞治療学会が第28回で、その少し前ですから30年前のことです。臨床の泰斗である高久先生と当時40才前の私が恐れ多くも臨床の会で講演に二人だけで呼ばれたことがあります。当時海外で遺伝子治療が大きく注目され、ちょうど私がアデノベクターを独自に開発して基礎・臨床研究でその供給と普及に努めていたころで、難しいと言われていたアデノベクターが日本ではあちこちで研究に使われているのに海外から訪日した研究者が驚いた時期でした。その時に高久先生が私に言って下さったことがその後の私の研究に大きな影響を与えました。それは非常にプラクティカルなことです。「(アデノベクターも含めて)日本は新しい技術を大切にしなければいけない。そうでないと将来日本は将来、外国に膨大な特許料を支払うことになる」。

まさか臨床の偉い先生からそのような実際的なお言葉をいただくとは思いませんでした。今でこそ特許の重要性は広く認識されていますが、その当時に特許の重要性を日本全体の問題として考えていた人ほとんどいなかったのではないのでしょうか。それが高久先生が新しい技術をどのようにお考えかを知り、新しい仕事ができればきっと高久先生は前向きに見ていくのださと思ひ、それ以来私の研究の方向性の一つとなりました。

それから20年が過ぎ、私は2014年の第20回遺伝子治療学会の会長を務めることとなり、その中で鐘ヶ江裕美先生の一般向けの教育セミナーがありました。ゲノム編集の最初の論文はノーベル賞受賞者のDoudnaとCharpentierの2012年のサイエンスの論文ですからまだあまり知られていない時のことです。高久先生はそのセミナーを一番前で聞いておられて、セミナーが終わった後に来てくださり、「ゲノム編集の話は聞いてもよく分からなかったが初めて分かった。このスライドをもらえないか」と言われました。私はとてもうれしただけでなく、高久先生の新しい技術への熱心な思いは変わっておられないとあの時の話を思い出しました。日本でもアデノベクターの技術はありますが、新型コロナで日本はアストラゼネカのアデノベクターのワクチンを国民の何割かを賄う

ために購入しました。これだけでも膨大な金額を支払っているのではないのでしょうか。

臨床の先生方もぜひゲノム編集のような新しい技術を大切にお考えいただければと思います。高久先生のご冥福をお祈り申し上げます。

高久史磨先生をしのんで

内閣府健康医療戦略参与
一般社団法人日本遺伝子細胞治療学会理事長
大阪大学大学院医学系研究科臨床遺伝子治療学寄付講座教授

第21回 JSGT学術集會会長 森下 竜一

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

高久先生と私との関連は、遺伝子治療の草分け時代にさかのぼります。高久先生は、日本遺伝子治療学会(現在の日本遺伝子細胞治療学会)を設立されるとともに、第一回の大会長を務められ、日本の遺伝子治療の発展に多大な貢献をされてこられました。私がお会いした時期は、既に東大から自治医大学長に移られたからで、高久先生は、私より上の世代の方では怖い印象をお持ちかもしれませんが、私にとっては父親の世代で非常にかわいがって頂いたという思い出しかありません。私が研究していたHGF遺伝子治療薬コラテジェンの開発では、臨床治験のみならず、PMDAとの折衝にも医学専門家として出席していただき、当時の厚労省・PMDAもあまりの大物が会社側で出られるというのでザワザワしたと、後で聞きました。また、アンチエイジング分野で最大の学会で私が今副理事長をしております抗加齢医学会でも高久先生には、長年顧問を務めていただき、ややもすると怪しげにみられる分野(笑)でも御指導いただき、大変感謝しております。

今我々は、新型コロナウイルスに対するDNAワクチンの開発をしています。既に承認されたファイザーやモデルナのRNAワクチン、アストラゼネカのアデノウイルスベクターワクチンも、全て遺伝子治療の技術を応用したものです。よもや、パンデミックウイルスに対するワクチンとして遺伝子治療が幅広く実用化されるとは、予想もできませんでしたが、2021年はある意味世界数十億人に遺伝子治療技術が応用される遺伝子治療元年になりました。本来現在のような

医療のダイバーシティが重要な時代こそ、高久先生の御意見・御薫陶に親しく触れたいのですが、残念ながらそれはかないません。本当に残念です。改めて高久先生の御冥福をお祈りいたします。

高久史磨先生を偲んで

東京慈恵会医科大学医学部看護学科
健康科学疾病治療学

第22回 JSGCT学術集会会長 大橋 十也

まさに浅野先生を始め高久先生までも日本の遺伝子治療の黎明期を創出された先生が、鬼籍に入られ時代の流れを感じております。

私などにとって、高久先生はまさに雲の上の方で、会場で講演を聴講している姿を拝見するだけでも緊張したものです。

その様な感じですので会話を交わす機会など、あまりありませんでしたが、2016年に私が第22回日本遺伝子細胞治療学会の会長を拝命したとき、会場の虎ノ門ヒルズにお越しいただき、遺伝子治療発展のために頑張ってくださいというお言葉を頂いたのを鮮明に覚えています。その時には色紙まで頂き、本当に恐縮して今でも私の居室に飾っております。

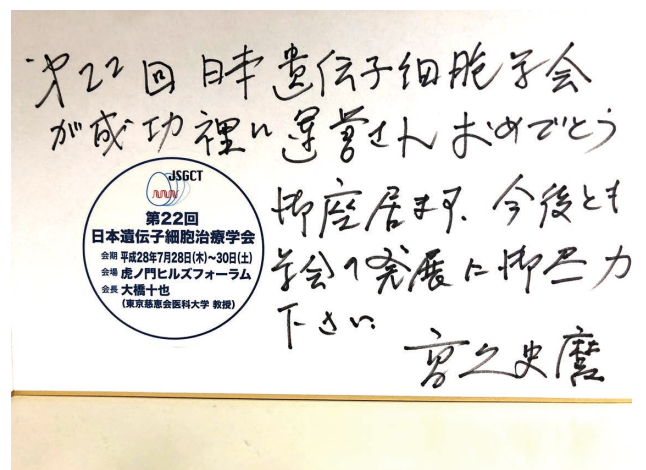
もう一つ思い出すのは、日本遺伝子治療学会が1994年に第1回大会を、高久先生を会長として東京大学の安田講堂で開催され、その時の熱気は今でも忘れられません。私は現在の学会のある意味、前身である日本遺伝子治療研究会の時からかかわってきましてので学会へと発展解消されたのは本当に喜ばしく感じました。ただ、その後の道は決して平坦なものではなく遺伝子治療は様々な試練があり、それを乗り越え、今、大きく発展しようとしております。これも黎明期ご貢献された高久先生を始めとする多くの先生方の存在なしにはなしえなかったものと思っております。第1回大会後は、一步引かれた大所高所から国などに対して遺伝子治療の発展に大きな援護射撃をしていただきました。その甲斐あり、日本発の遺伝子治療製品も出てまいりました。

一方、まだまだ遺伝子治療は発展段階の治療法であることも事実で、ヒトで行えば今まで分からなかった事実が浮かび上がってきています。ただ一部の治

療法がなかった疾患については予測以上の画期的成果を上げていることも事実ですので、高久先生たち先陣が残してくれた道筋を大切に、今後も健全な形で遺伝子治療が発展することを願ってやみません。

最近、高久先生の御息がお父様の事をインターネットで連載されていて、欠かさず読ませて頂いております。仕事面ではない、高久先生のお人柄がわかり、仕事への情熱ばかりでなくご家族への愛情も感じられ、公私ともに素晴らしい先生で会った事を再確認しております。

高久先生、どうぞ安らかに休息を頂いて天国より遺伝子治療の発展を見守り下さい。



高久史麿先生 ありがとうございました

東京大学医科学研究所

第25回 JSGCT学術集会会長 藤堂 具紀

高久史麿先生は東京大学昭和29年のご卒業で、同級の中では最も若いのだと伺ったことがあります。申すまでもなく、高久先生は私にとって決して到達しえない目標であり常にご指導を仰ぐ大先輩でありました。私が医学生頃の第3内科教授でしたので、東大で直接高久先生のご講義を受ける幸運に恵まれました。

私が高久先生と直接言葉を交わすようになったのは、国立病院医療センター時代です。1992年に、2年間の休職(ドイツ留学)から戻ると、高久先生が東大を退官して病院長になられていました。高久先生は病院長、私は病院で最も若い脳神経外科の常勤医(厚生技官)でしたので、天地ほどの開きがありましたが、なぜか高久先生が私を覚えていて下さって、当時国立病院からナショナルセンターに組織が昇格する話が進んでいた頃ですが、よい英語名を考えてほしい、などとお声がけを下さったりしました。国立病院医療センターは総合病院でしたが、ナショナルセンターは、がんや循環器病のような専門のセンターにならなくてはならない、というので、結局は国際協力を専門とすることになりましたが、一時期は遺伝子治療も専門の候補に挙がっていたように聞いています。私は1995年に再びアメリカに留学することになり、いろいろな推薦を頂戴しに、図々しく高久先生のいらっしゃる総長室を時々訪れましたが、高久先生は嫌な顔ひとつせず、必ず自ら、私の目の前で印を押したり署名したりして下さいました。

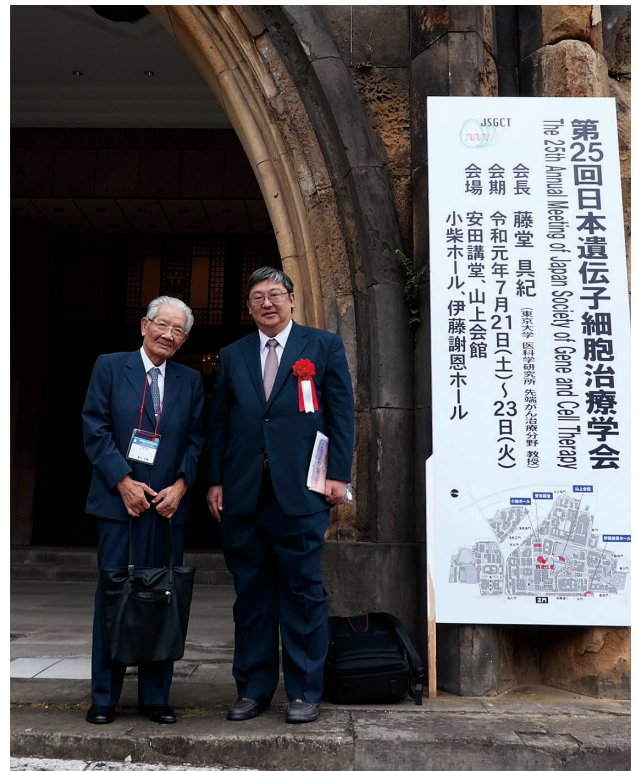
実は、高久先生との思い出をひとつひとつ書き出してみたのですが、書き綴っているうちに、それらを文章にしまうと、高久先生に対するご恩が浅薄なものになってしまうような気がしてきました。なので、多くを文章に綴るのをやめることにします。

最後に高久先生に直接お世話になったのは、2019年の第25回日本遺伝子細胞治療学会学術集会にご出席賜ったときでした。開会のご挨拶を口頭でお願いし

た際には、すぐにご快諾下さり、直ちにご手帳に予定を書きこんで下さいました。当日も自ら案文をご用意下さり、安田講堂で大変ご丁寧なご挨拶を行って下さいました。その前日には、上野の韻松亭で行った招宴(拡大委員会)にもご出席下さいました。おそらく私も弟子の末席に加えて下さっていたのかと思いますが、弟子に対して、大変義理堅い先生でした。

ウイルス療法開発についてはずっと気にかけて下さり、臨床論文がpublishされたら、真っ先に高久先生にお届けするお約束をしていましたが、それが間に合わなかったことが大変残念です。

高久先生、長きに渡ってご指導ご支援下さいまして、本当に有り難うございました。



2019年7月21日 東京大学安田講堂前にて。

高久史麿先生を偲ぶ

九州大学大学院薬学研究院

第26回／第28回 JSGCT学術集会会長 米満 吉和

昨年の浅野茂隆先生ご逝去の心痛も癒える間もなく、今度は高久史麿先生の訃報に接し、ただただ驚いています。日本遺伝子細胞治療学会は、これでお二人の巨星・精神的支柱を失うこととなり、理事の一人として、まだその事実を受け容れられずにいます。

もちろん私が駆け出しの30年超前から、高久先生は既に医学界の雲上人でいらっしゃる、専門領域も違いますことから、直接接する機会は無いと思っていましたが、ひょんなことからお声がけ頂くようになりました。それは私がセンダイウイルスベクターについて(株)ディナベック研究所(その後民間化してディナベック株式会社、現在はIDファーマ)と共同研究を開始した1999年頃からでした。同社はミレニアムプロジェクトの一貫として旧医薬品機構が民間製薬企業7社と共同出資して設立された官民共同プロジェクトでしたが、当初民間企業サイドが尻込みしており、困った機構から高久先生へ相談、高久先生自ら企業を説得なさったと伝え聞いています。その経緯のせいか、高久先生は同社の後見人的お立場と誰もが認識していたとのこと。先生は、学会で私が発表しているのを見掛けると、「頑張ってるね!」といつもきさくにお声掛け頂いていました。

久しぶりに高久先生とお話する機会を頂いたのは、2013年2月、高久先生が瑞宝大綬章を受賞なさったお祝いをNPO法人ロシナンテス代表の川原尚行君(九州大学第二外科の後輩)が企画、私もお招き頂いた際でした。高久先生と川原君は、小倉高校(旧制小倉中学校)の先輩・後輩の間柄だとのこと。



その時の最大の思い出は、高久先生直筆の色紙を頂戴したこと。その色紙には「絆」という1文字が書いてあり、人生を豊かに生きるために、人間関係を特に大事になさった先生の想いが込められているのだと感じました。この色紙は現在額に入れ、私のオフィスのいつも目が行くパソコンの上に飾っています。



そして最後にお目に掛かったのが、2019年に東大安田講堂で開催された学術集会(藤堂会長)の時。

確か本学会の第1回も安田講堂で開催され、その時の会長が高久先生であったことから、四半世紀後の原点回帰に、感慨深いお気持ちだったと拝察しています。「高久先生、来年2020年は私が会長で博多で開催しますので、是非お運びください！」と申し上げると「楽しみにしていますよ」とニッコリなされた笑顔が、とても印象深く記憶に残っています。結局コロナ禍による緊急事態宣言でJSGCT2020が残念ながら中止となり、現在そのリベンジであるJSGCT2022の準備途中で、本学会は高久先生を喪ってしまうこととなっていました。

高久先生が初めて学術集会の会長をお務めになって、間もなく30年。

いよいよ日本の遺伝子細胞治療が開く時期に差し掛かって来た大事に時期になりました。どうか、天国より私どもを暖かく見守って頂けると幸いです。

合掌。

追悼

自治医科大学 神経遺伝子治療部門

村松 慎一

高久先生は自治医科大学の設立(1972年)に尽力され、以来、内科教授、学長として多くの後進を育成してきました。地域医療の増進を目標とする自治医科大学でへき地医療とは直接繋がらない遺伝子治療の先端研究が活発なのは、高い学術水準を維持することが地域の福祉の向上に繋がるという理念のもと、早くから遺伝子治療の発展を予見して強力に支援した高久先生の慧眼に依ります。先生の学術的な貢献は周知のところです、散漫になりますが私の個人的なエピソードをいくつか紹介させていただきます。

私は、1995年に米国NIHのHematology Branchに留学しました。ここは、島田隆先生、小澤敬也先生をはじめJSGCTの複数の会員が在籍した研究室です。当時からNIHでは霊長類の施設が充実しており様々な研究が実施されていました。高久先生は渡米の際によくNIHに立ち寄られましたが、米国の状況を留学生からお聞きになっていました。そして日本で霊長類の研究施設を創設すべく関係機関と調整されたのです。その結果、感染症研究所の霊長類センター(現在の医薬基盤・健康・栄養研究所、霊長類医学科学研究センター)に遺伝子治療の研究区画が整備されました。この施設で、私たちはパーキンソン病のモデルサルを作製しAAVベクターによる遺伝子治療を開発してきました。この時、確立したモデルサルの作製方法はiPS細胞の移植実験にも応用されていますので、霊長類センターは再生医学の発展にも寄与したことになります。

さて、私がNIHに留学してすぐの頃に高久先生がお見えになったことがありました。実験室まで視察に来られた先生は、棚においてあった日本語の書籍(Y社の遺伝子治療特集号)を目にとめられ、「これを読んでいるの?」と言おっしゃいました。「米国まで来て周回遅れの日本の総説など読んでいては駄目でしょう」という叱咤激励でしたが、後年、この話をY社の編集者にしたところ、「あの書籍は自信作だったので…」と少ししよげていました。私は1997年に帰国し、その後も何かと御指導頂いていました。2010年には台湾大学に出張してDr. HwuとAADC欠損症に

対する遺伝子治療を実施することになり、学長であった高久先生に何うと快く承認下さいました。先生は、多くの要職を兼任されていたので、大学のある栃木と都内を一日に2往復することもまれではありませんでした。駅などで偶然お会いすることもよくあり、小山から東京までの新幹線の車中で並んで座って書類を校閲していただいたこともあります。

様々なことを御教示いただきましたが、身近なところでは「原稿を依頼されたら断ってはいけない」とおっしゃっていたのが印象に残っています。企画する側は断られると次の候補を探さなくてはなりません。この点、私自身、能力不足による不義理を反省する次第です。

高久先生が四半世紀前から推進してきた遺伝子治療が、いま急速に発展しています。どうか、天上より見守り下さい。

協賛企業一覧

一般社団法人日本遺伝子細胞治療学会 (JSGCT) の法人会員は以下のとおりです。
当会に対するご賛助に深く感謝の意を表します。

〔ダイヤモンド〕

アンジェス株式会社 タカラバイオ株式会社

〔シルバー〕

アミカス・セラピューティクス株式会社 オンコリスバイオファーマ株式会社
JCRファーマ株式会社

〔ブロンズ〕

アステラス製薬株式会社 アッヴィ合同会社 株式会社遺伝子治療研究所
C4U株式会社 株式会社ステムリム 株式会社ダイセル ノバルティスファーマ株式会社

(五十音順)

一般社団法人日本遺伝子細胞治療学会 (JSGCT) News Letter - 2022編集局

学会事務局 大津 真 (北里大学)
鐘ヶ江 裕美 (東京慈恵会医科大学)
中 神 啓 徳 (大阪大学大学院医学系研究科)

連絡先 JSGCT事務局
〒106-0041 東京都港区麻布台1-11-9
BPRプレイス神谷町
株式会社コンベックス内
Tel: 03-6432-0272 Fax: 03-3505-3366
Email: jsgct@convex.co.jp
URL: <http://www.jsgct.jp>